

地域の縁をつなぐ防災訓練

本山第二小学校区防災福祉コミュニティ「秋季防災訓練」

開催日：平成28年11月13日(日)10:00~13:00
場 所：野寄公園、本山西地域福祉センター
参加者：本山消防西分団、甲南大学、本山西ふれあいのまちづくり協議会 など



大学生を先頭に、災害時を想定しながら避難



毎年、たくさんの団体が協力して開催



公園内の防災倉庫にある防災資機材



毛布と物干し竿で担架をつくる



土のうはしばった口を下に、積み方も工夫して

岡本・西岡本・田中地区を対象に、ファミリーやシニア世代など約230名が参加した秋季防災訓練。中には、阪神・淡路大震災が発生してから9ヵ月もの間、この訓練の開催場所である「野寄公園」の仮設テントで避難生活を送っていたという方もおられました。

開会のあいさつの後は8つのグループに分かれて、公園内に準備された防災訓練プログラムを実施。甲南大学の学生がサブリーダーとして、各グループを誘導しました。「水消火器」「放水訓練」「防災資機材の紹介」「簡易担架」「救命処置」「車イス」の他、「土のうづくり・積み方」など、山が近いこの地域ならではの土砂災害を想定したプログラムも。7つのプログラムをめぐった後は「有備無患(備えあれば患い無し)」と刻まれた石碑の前で記念撮影を行いました。

また、会場では、まちづくり協議会や婦人会など、この訓練に協力している団体の色とりどりのジャンパーにまぎれて、「野」という文字が描かれたパーカーを着用した若い人たちの姿が。野寄地区のだんじりを担う若者が防災訓練でも活躍していました。

その後、グループごとに非常時の避難を想定しながら本山西地域福祉センターへ移動。ふれあいのまちづくり協議会のみなさんによる炊き出しカレーを味わって、終了となりました。防災福祉コミュニティの木下昭満さんは「単に防災に対するの知識や技術を増やすだけでなく、防災訓練を通して、気軽にあいさつし合えるまちを、人のつながりをつくりたい」とのこと。防災からはじまる地域の縁、その想いが伝わってくる防災訓練でした。

▲ omusubi ポイント!

参加していた甲南大学の学生が語ってくれた「地域の方がとても気にかけてくださり、仲良くなれた」「自分たちの大学の学生に、もっと知って欲しい」「学生への広報なら、自分たちも手伝えるのでは?」など、地域の防災訓練を「自分ごと」として考えている言葉が印象的でした。(取材:中野優)

「常にそなえる」大切さを学ぶ

甲南大学は、本山第二小学校区防災福祉コミュニティが主催する防災訓練に協力・参加しています。平成27年度の秋季防災訓練では甲南大学が会場となり、学生が地域の方々に構内の防災設備を案内したり、煙体験を通じて煙から避難する訓練を行いました。キャンパスには大災害の経験をわすれないようにと「天の災いを試練と受け止め 常に備えて 悠久の自然と共に生き輝ける未来を開けていこう」と刻まれた「常二備へヨ」記念碑が建てられています。

▲ omusubi ポイント!

学生は、大学周辺の住民の方々と交流しながら災害時の動き方を学べます。地域の人々にとっては大学の防災設備の見学ができるいい機会! 大学と地域が協力して訓練を行っていることはあまり知られていないので、大学内でも地域でもPRしたいと思いました。(取材:丹羽巧)

防災が結ぶ、地域と大学生

DPLSの部員は、防災と救命を通じていのちの大切さを市民にアピールすることを目的に活動しています。地域の消防団にも6名の部員が加入し、地域の方と一緒に防災活動に取り組んでいます。学内では、けが人や病人の救護や搬送を想定した訓練を行っています。また、インストラクターの資格を取得した学生は「心肺蘇生法とAED講習会」「ケガの手当講習会」の講師として、大学内外で講習を行い、救急車が到着するまでに最善の応急処置ができる人材の育成にも取り組んでいます。

▲ omusubi ポイント!

DPLS部員が消防団に所属して災害時を想定し、地域防災に取り組んでいること、救命救急を行える人材を育成していることに注目。これらの活動を通して地域住民や学生が防災への意識が高まり、もっと連携できたらいいなと思いました。(取材:荒木仁志)

「omusubi」第4号編集チーム

上山 治夫 地域とのつながりが、防災への第一歩!
北岡 裕 地域社会で、生涯現役。健康寿命を平均寿命に!
都築 いく子 イベントに参加して気が引き締まる思いです。

中山 諒子 甲南大学 文学部1回生
丹羽 巧 甲南大学 法学部2回生
加地 龍之介 神戸国際大学 リハビリテーション学部3回生
荒木 仁志 神戸国際大学 リハビリテーション学部3回生
中野 優 デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)

編集後記

「防災」がテーマの今号では、防災に関心をもつ学生が編集チームに加わってくれました。「地域と関わりのない学生が多いから、omusubiが地域の活動に参加するきっかけになれば」という意見もあり、学生と地域が結びつくことを意識して制作しました。地域で防災に取り組む人たちは、若者の参加にとっても期待しています。まず一歩、踏み出してみませんか。地域には、素敵な人がたくさんいますよ。(東灘区社会福祉協議会 山崎巨)

東灘区社会福祉協議会へのご寄付、ありがとうございました。

(平成28年3月~平成29年2月) (※五十音順)
・キミ・ロイヤル本店 様 ・御影本町五六自治会ボランティア部 様
・キミ・ロイヤル甲南店 様 ・松崎好志子 様
・平澤時代 様 ・武庫川女子大学 心理・社会福祉学科 様



「omusubi」は、赤い羽根共同募金の寄付でつくられています。

omusubi

地域の手と手を結ぶ、
できごとメディア
「おむすび」神戸・東灘
第4号
2017年3月発行

発行人 …… 社会福祉法人 神戸市東灘区社会福祉協議会
〒658-8570 神戸市東灘区住吉東町5-2-1
TEL 078-841-4131(代表)
FAX 078-841-7999
メール mail@higashinada-syakyo.or.jp
http://www.higashinada-syakyo.or.jp/

企画・制作 …… デザイン・クリエイティブセンター神戸
取材・執筆サポート …… 二階堂 薫(コピーライター)
デザイン …… 和田 武大(DSIGN HERO)
写 真 …… 北岡 裕
スペシャルサンクス …… ご協力くださった皆様

「おむすび」
神戸・東灘
2017.3
第4号

地域の手と手を結ぶ、できごとメディア

omusubi

まちや人、心を結ぶできごとを
わかりやすく伝えるために誕生した
東灘区社会福祉協議会の広報紙
『omusubi』は、
おかげさまで4年目を迎えました。

今回は、

防災に関する取り組みと
災害時の要援護者

に着目し、ぜひ知っておいてほしい
さまざまな取り組みを特集します。

いざという時、
助けて！と言い合える、
地域のつながりを。

昭和13年の阪神大水害、平成7年の阪神・淡路大震災など…東灘区は大きな災害に何度も襲われました。近年、災害へのそなえとして地域の住民が力を合わせて自主的に防災活動を行うことが重要だとされていますが、地域の防災への取り組みに参加していますか？

たとえば、地域の防災福祉コミュニティが主催する防災訓練では、避難誘導や消火方法などを体験できます。注目すべきは、参加を通して近所の人たちとのつながりが生まれること。災害は突然襲ってくる上、常に自分の力で避難できるとは限らないため、日頃からあいさつを交わすなど顔の見える関係を築くことが防災の大事な第一歩となります。氣にかけ、声をかけ合い、いつでも助け合える普段からのつながりが、あなたの命を救うことにつながるのです。

今号では、より幅広い方々に防災意識を持ってもらうために、東灘区で行われている取り組みをご紹介します。まずは、地域の防災活動に参加することから始めてみませんか。

災害時要援護者とは？

災害発生時、安全な場所への避難や避難場所での生活において、手助けや支援を必要とする人たちのこと。

たとえば…

- 起こった事態を理解できない認知症の人
- 周囲の状況が把握しづらい視覚障害者
- サイレンや音声の情報が伝わらない聴覚障害者
- 移動に限界のある車いす利用者
- 人工呼吸器など医療的ケアが必要な人
- てんかん発作やパニックを起こしやすい知的障害者
- 感覚過敏な発達障害者
- すみやかな移動がむずかしい妊産婦や乳児
- 日本語の理解が困難な外国人
- 災害時に負傷し、避難支援が必要な人 など

▲「omusubiポイント」とは？

毎年、各地域で行われている防災訓練や災害にそなえる取り組みを外からの視点で見つめると？シニアと学生で結成された『omusubi』編集メンバーによる、取材後の感想や今後の展望を記しています。



ボーイスカウトの誘導で、避難場所へ向かう

多世代で守る、地域コミュニティ

本山第一小学校区防災福祉コミュニティ
「防コミ避難訓練」

開催日：平成28年11月12日(土)10:00～12:00
場 所：天上川公園～本山地域福祉センター
参加者：本山中央婦人会、おやじの会、本山中学校、
本山児童館、ボーイスカウト、
明倫会(宮地病院) など

「災害は必ずやって来る」という認識のもと、この地域ならではの、山麓地域特有の地形を考慮した訓練が行われました。子どもからシニア世代まで、幅広い世代の124名が3班にわかれて消火器の使い方や消火栓を使用した放水訓練、土のう積みなどに挑戦。ボーイスカウトが避難者を誘導し、本山中学校の生徒が車椅子利用者を介助して災害発生時を想定した仮設橋を渡るなど、地域福祉センターまで徒歩でゆっくりと避難しました。

地域福祉センターでは東灘消防署の講評を聞き、婦人会のみなさんによる炊き出しカレーがふるまわれました。また、訓練に参加していたJICA(国際協力機構)の発展途上国地域防災訓練生11名(8カ国)が、参加している小さな子どもたちの姿にとっても感心していたのが印象的でした。この防災訓練をきっかけに参加者同士の交流がさらに深まり、地域の防災意識もますます高まっていたようです。

▲ omusubi ポイント！

「昔は青年団がリードしていたが、今は若い担い手が少ない。若手に参画してほしい」と語る防災福祉コミュニティの会長、檀之上さん。確かに、シニアと子どもの中間層がもっと増えれば機動力が増すのでは…と思いました。若者の参加で盛り上がりを見せる「だんじり祭り」の組織力などを活用したコミュニティの復活が、災害時にも生きるように思います。(取材:北岡裕)



水の圧力に負けないよう、しっかりと



ていねいに、土のう積みにはげむ



仮設橋は足元に気をつけて、ゆっくり渡る

災害時の状況を、リアルに想定

魚崎町防災福祉コミュニティ
「第11回 災害時要援護者避難訓練」

開催日：平成28年11月13日(日)9:00～11:00
場 所：魚崎地区全域～住吉川緑地
参加者：魚崎消防団、魚崎婦人会、
魚崎北部・南部の民生委員児童委員協議会、
本庄青木分団、魚崎北部・南部のあんしん
すこやかセンター など

魚崎地区のあちこちから、地区統括防災リーダーを中心として、要援護者とともに住吉川緑地をめざすのが、この訓練の特徴のひとつ。参加者はまず、「非常持ち出し袋」を手に、自治会ごとに決められた場所へ避難します。安否確認を行い、災害時要援護者をサポートしながら安全な避難ルートを進み、到着したら本部に報告、倒壊家屋救出訓練に挑みます。「非常持ち出し袋」は防災への意識を再確認して、そなえ方を共有してもらうためのツールです。戸建の家屋が多くて倒壊による通行止めが起こる…など災害時の状況を想定した情報カードの活用もポイントで、家屋に閉じ込められた被災者を速やかに救出する方法を教わるなど、いざという時に活用できそうな、実践的な防災訓練でした。

▲ omusubi ポイント！

「非常持ち出し袋」の持参や被災状況を想定した「情報カード」の作成、倒壊家屋救出訓練は他の防災訓練ではあまり見られないもの。特に、地域ごとに異なる詳細な被害状況の想定や救出訓練にはかなりの手間がかけていました。しかし、これらはすべて大災害の発生時に役立つ、重要な訓練だと思います。(取材:加地龍之介)

住民にとって現実的な避難をめざす

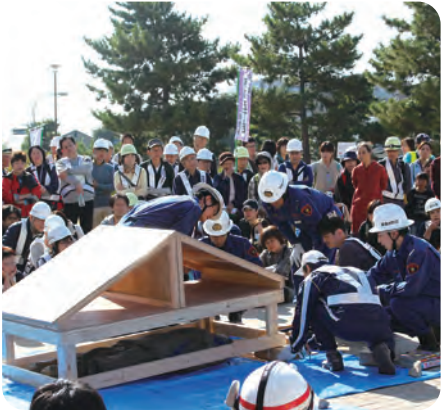
御影本町五六会館の挑戦

取材日：平成28年12月3日(土)
場 所：御影本町五六会館
取 材：御影本町五六会自治会長 杉本憲一

いざという時にそなえて、独自の取り組みを実践している御影本町五六会館。自治会長の杉本憲一さんによると、「形式的な避難訓練は現実的ではありません。助ける範囲をしぼり、助け合う仕組みをつくらなければ」とのこと。近隣のシニア世代の住民や各エリアの班長には日ごろから「災害が発生したら、五六会館へ避難してください」と声をかける他、15～20人程度が2～3日は避難生活を送れるよう、さまざまな防災グッズを常備。常に万全の体制で、設備の見学会も行われています。

▲ omusubi ポイント！

杉本さんは形式よりも、ものごとの本質を重視する方なのだなと思いました。少々シビアかもしれないけれど、非常時に「本当に」助けられる範囲をしぼり、近隣で助け合う仕組みをつくるのが大切なんだ、という強い想いが伝わってきました。(取材:中山諒子)



消防署による倒壊家屋救出訓練を見学



いざという時は、家族が助け合って避難



備蓄食料として保存期間が25年の宇宙食を用意するなど独自の備えがされている